宮崎大学学術情報リポジトリ
University of Miyazaki Academic Repository

高等学校家庭科におけるホームプロジェクトの研究(第2報)：宮崎県高校家庭クラブ連盟の活動とホームプロジェクト

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2008-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂本, 和代, 福原, 美江, Sakamoto, Kazuyo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/1406

宮崎大学教育文化学部紀要　芸術・保健体育・家政・技術　第９号（2003）73－94頁

高等学校家庭科におけるホームプロジェクトの研究（第２報）
－宮崎県高校家庭クラブ連盟の活動とホームプロジェクト－

坂本和代*　　福原美江

A Study of Home Project Method in Home Economics for Senior High School (PART II)
－Future Homemakers of Japan and Home Project Method in Miyazaki Prefecture－

Kazuyo SAKAMOTO・Yoshie FUKUHARA

Ⅰ．研究の目的と方法

第１報（本紀要、第８号、2003年３月）では、高等学校家庭科における約50年間の全国的なホームプロジェクト活動について考察し、とくにホームプロジェクトテーマとしての生活課題への問題意識を分析し、テーマ設定と時代背景との関連について明らかにした。

第２報の本稿では、宮崎県の高等学校家庭科で取り組まれたホームプロジェクト、及び家庭クラブ活動の実態を明らかにしたい。具体的には、宮崎県におけるホームプロジェクトのテーマと指導方法を明らかにし、さらに、宮崎県高等学校家庭クラブ連盟の５０年間の活動を振り返り、本県の学校家庭クラブ活動の実態をあとづけることにする。さらに、今後のホームプロジェクト活動への示唆を得るために、家庭科教員と生徒に対し、ホームプロジェクトへの取り組みの実態とその意識についてアンケート調査を実施した。

研究方法は第１報と同様で、資料分析による文献調査と、質問紙調査法や聞き取り調査法等である。本県に関する資料は、宮崎県産業教育史や、宮崎県高等学校家庭クラブ連盟編集の『はまゆう』、宮崎県高等学校教育研究会・家庭部会編集の『会誌』[1)]等である。これらの資料は、戦後の宮崎県高校家庭科教育史研究には貴重な資料であるが、今回の資料調査で、高校家庭科教育研究会・家庭部会の事務局にも完全には揃ってはいないことが明らかになった。そこで、本研究を契機に、関連資料の収集と整理等を行い、今後、宮崎県高校家庭科教育史研究を蓄積し推進するためにも、関連資料の所蔵先や所有者等の確認等を可能なかぎり明らかにしていくことにしたい。

Ⅱ．宮崎県高等学校家庭クラブ連盟の発足とその活動

１．全国高等学校家庭クラブ連盟の結成

まず、宮崎県の高等学校家庭クラブ活動（以下、「本県高校家庭クラブ」と略称）をあとづける前に、全国組織としての全国高等学校家庭クラブ連盟（以下、「全国高校家庭クラブ連盟」

＊ 宮崎県立高鍋農業高等学校

と略称）について、その概要を紹介しておく。

全国高校家庭クラブ連盟の結成大会は、1953（昭和28）年８月に、各地区の代表約2300名が参加して、東京・お茶の水女子大学で開かれた[2]。この結成大会の契機は、1950年から翌年にかけて、当時の文部省文部事務官の山本キク、及び東京都立南多摩高校教諭仙波千代ほかの家庭科関係者17名が、アメリカ合衆国の家庭科教育視察に派遣され[3]、家庭科を履修している生徒たちの組織・FHA（Future Homemakers of America）と交歓して帰国したことや、各都道府県の家庭科教員からの全国的な組織設立の要望にこたえて結成された[4]。この全国高校家庭クラブ連盟の結成以前にも、すでに地区での家庭クラブ連盟が結成されており、1950年には新潟、大阪、神奈川、三重、岐阜、京都の６府県で、10年後の1960年には兵庫県に結成され、これにより全国のすべての都道府県に高校家庭クラブ連盟が結成されたことになった[5]。各都道府県の家庭クラブ連盟は、地区ごとの高校家庭クラブ連盟に加盟し、加盟した都道府県には、家庭クラブ連盟の事務局をおくことになっている。

このように、高校家庭クラブは、1950年代から高校家庭科において取り組まれていたが、各学校を単位とする学校家庭クラブ活動が、高校学習指導要領・家庭科の内容（大項目）として位置づけられたのは、1978年版『高等学校学習指導要領　家庭編』の「家庭一般」からで、1989年版では、「⑤　研究活動、奉仕活動、社交活動などの分野に分けて、全校生徒がそれぞれの分野に所属して、諸活動に参加できるようにする。」（『高等学校学習指導要領解説家庭編』、1989年12月、開隆堂、37頁）ことになり、諸活動を推進していくための調査や研究の対象は、家庭生活や地域生活としているため、家庭クラブ活動は、家庭科の授業時間内と放課後や休日の時間の両方を利用して行われている。

２．宮崎県高等学校家庭クラブ連盟の結成

本県の高校家庭クラブ連盟は、1952（昭和27）年2月に結成された。この結成経緯についての詳細を記す資料はないが、1966年（昭和41年）から1983年（昭和58年）までの18年間、宮崎県教育委員会で家庭科の指導主事の要職にあった小川正子[6]は、結成当時を回顧して、資料１のように述べている。

資料１　「連盟結成－昭和27年２月12日　寒い朝でした」小川正子

新設間もない高原畜産高校にいた私は、生徒を連れて参加。高岡の旧街道、発電所の前は徐行の立札をみながら、妻高校へ行ったこと、前日？予餞会があったとかで、舞台装置に使ったとおぼしき木材が散っていたことなどが、なぜか思い出される。ホームプロジェクトとか家庭クラブとか、耳に新しい言葉にとまどいながら、先生方の熱気にうたれ、やらねばと、若く経験の浅い私ながらも決意を新たにしたことであった。前年の夏、鹿児島で開催されたワークショップで、文部省の山本キク先生から懇切なご指導をいただいたこともあわせ、改めて新しい時代の家庭科教育の課題を認識したともいえよう。

“家庭クラブ十周年のあゆみ”と題する昭和37年度刊行のはまゆうの座談会記録をみると当時の模様を詳細にうかがえるが、それによると「学校単位のクラブを結成したのは大宮高校が最初で、クラブの公開をしたのはたしか昭和25年だったと思う」と横山ユキオ先生が話しておられる。

全国連盟の記録によると“昭和24年ウイリアムソン先生の指導により、家庭クラブ活

動、ホームプロジェクトを取り入れた家庭科の指導法が普及され、各県に研究指定校が決められた”とある。大宮高校もその指定校としての研究を公開されたのではなかろうか。その年度は定かではないが、私も大宮高校の研究発表等を聞き、吉村初子先生の御案内で一ノ鳥居の近くの谷というお菓子屋さんの家で、ホームプロジェクト、（たしか勉強部屋の改善）を見学したことを思い出す。これがプロジェクトかと再認識したことも記憶する。その日の研究協議の際、助言者として長崎県の指導主事が来ておられた。彼女は私の同窓生、あまりの立派さに遂に声をかけそびれたことも忘れられない思い出の一つでもある。

［出典：家庭部会『会誌』第19号、1982（昭和57）年、69頁］

この回想から指摘できることは、①本県の高校家庭クラブ連盟の結成は「1952年２月17日」[7]で、結成大会の会場は県立妻高校であったこと、②宮崎県立高校で、初めての学校単位の家庭クラブを結成したのは宮崎大宮高校であること、③その時の大宮高校の家庭科教員は吉村初子で、その活動は「谷というお菓子やさんの家」の「勉強部屋の改善」をテーマにしたホームプロジェクトであったこと、などである。

ところで、前掲の資料１に記載されている宮崎大宮高校の「指定校」に関してであるが、宮崎大宮高校は、1948年度から1950年度の３カ年、文部省の家庭科ホームプロジェクト研究指定校になっている[8]。同書の『家庭科　ホームプロジェクトのてびき』（152頁～157頁）によれば、ホームプロジェクトのテーマは「洗たく台のくふう」で１年生による研究である。その内容は、当時手洗いであった「たらい」の水を簡単に流すための台の傾斜角度について、実験的に最適値を求め、実際に洗たく台を製作したものである。この活動に対する本人の自己評価では、①設計通りに製作できず、しなおしの所もできて、思ったより時間を費したこと、②高さは自分の高さに合わせたのでたいそうぐあいがよいこと、③計画は周到、緻密でなければならないことを痛感したこと、④この製作にあたったときの心構えと積極的態度は、生活のあらゆる面に及ぼしていきたいこと、と述べている。それに対し生徒の母親は、「たいへんりっぱにできているが、運搬に便利なように六脚はもう少し細くてよいと思われる。」と答えており、指導した家庭科教員は、「科学的で研究的でしかも実行的で、ホーム　プロジェクトとして望ましい行き方である。持ち運びに重い点が少し欠点である。」と評価している。

このホームプロジェクトは、本県における戦後高校家庭科のスタート時点の事例のひとつであるが、このようなホームプロジェクトの取り組みからは、生徒一人一人が日常生活の中から問題点を発見し、それを実験的にまた研究的に追究して問題点を解決していく方法で、この活動を通して精神的な成長を遂げることを目的としていたことが窺える。

さらに、本県高校家庭クラブ結成と同じ年（1952年）の８月に、九州地区高校家庭クラブ連盟が福岡市で結成され、本県からは宮崎大宮高校、妻高校、延岡恒富高校（現、延岡高校）の家庭課程の生徒会長が出席した[9]。その後、全国の８高校が産業教育研究の指定をうけたが、本県では、小林高校が1952（昭和27）年から1953年の研究指定校になった[10]。その研究テーマは「地域の生活改善と家庭科カリキュラム」であり、研究成果は1954（昭和29）年７月４日～５日に小林高校で公開された。その当時、小林高校の家庭科教員でありその指導者であった野津初子、及び前述の小川正子は、その当時の研究活動について資料２及び資料３のように回想している。

資料２　「三十年前の思い出」元顧問教師　野津初子

（前略）研究面では先づ実態を把握するための調査の正規の方法についての勉強会から調査対象決定、全生徒の通学地域のクラブ員での調査班づくり、生活関連の問題の検討等等必要事項の準備から集計までには日数を要しましたが、実態を知り得て有意義に利用されました。内容によるモデル地区指定につき地域ごとの集会を、母親、婦人会等に呼びかけ学校側より説明、協力の依頼等休日、放課後、夜間の行事になりましたが、一応ホームプロジェクトにより理解されていたのと、時機的に好適であったのか、この機会に改善をという意向が高まり協力を得ました。主として住、食関係のもので学習会、実習指導と時間の許す限り顧問も多忙でした。特色を持ったのは、調査でより実態を知り広範囲に及ぶ乳幼児の栄養問題と育児法の指導で、これは当時家庭科に愛育会の研修課程を経た専門的な先生があり、保健所との連絡等も取りながら又、定時制分校の所在地域でありクラブ員の活動時間も得られ、問題の解決策に大きな成果をあげられたのは、地域の乳幼児健全育への努力を続けた家族、クラブ員、指導者一体となっての学習成果として高く評価されました。指導された岡上先生がご健在ならきっと追跡調査等も行われたと思いますが、ご結婚後二女を残されご他界され誠に惜しい先生を失い残念でした。地元では当時のクラブ員がよいお母さんの年代です。先生のご指導は、今も引きつがれていることを信じています。

［出典：宮崎県高等学校家庭クラブ連盟『はまゆう』22号
（家庭クラブ30年のあゆみ特集号）、1982年、26～28頁］

資料３　「文部省指定　小林高校での研究の日々」小川正子

小林高校の当時の研究紀要は今も手許にある。30年の歳月は、その紀要の表紙の古さにみられるが、下田校長先生の文章は今もそのまま生きて輝やいているように感ずる。日曜もほとんどなしに、けれどすごく楽しい研究に取り組み、野津先生を中心に笑いの中に夜半家路につくこともしばしば、真面目な顔で冗談を言って皆を笑わせた岡上先生も今は亡い。

小林の研究の主体は地区活動、先生方にはそれぞれ担当の地区があり、台所の改善に、社会奉仕に、当時もっとも新しく進んだ活動であったことは確かである。とくに野尻を担当された岡上先生の乳幼児の保育はすばらしく、後の延岡高校の研究に引き継がれたものと考える。

当時の家庭クラブ会長は高卒後直ちに小学校の先生となり、今は家庭にあってよき妻、よき母としてがんばってる様子で、家政科出身らしいキメ細かな家庭生活が想像される。研究公開は県外からの参観者もあり、非常に盛会、とりわけスライドによる発表は当時として先端のものと言われ、是非全国大会で発表をとの文部省山本キク先生のおすすめで校長と野津先生が出会されたが、会場にスライド設備がなくて出来なかったとか。今では考えもつかない状況で、それほど新しい研究発表だったとも言える。

小林の活動はアメリカにも紹介され、教科書にも掲載されたと聞いているが、後輩の励ましとなったことは事実である。

［出典：前掲、家庭部会『会誌』第19号、69頁］

以上のように、宮崎県では全国高校家庭クラブ連盟の結成以前から、文部省の研究指定を受け、高校家庭科のホームプロジェクト活動は取り組まれていることが明らかになった。前述の小川正子は、このような宮崎県における戦後初期の活動から1982年の30周年までの高校家庭クラブ活動の発展過程について、以下のように区分し位置づけている。

１．胎　動　期	1948年～1952年	県高校家庭クラブ連盟結成まで
２．初期活動期	1953年～1955年	小林高校産業教育指定研究
３．基礎確立期	1956年～1959年	県研究発表大会開始
４．発展第１期	1960年～1963年	機関誌『はまゆう』発行
５．発展第２期	1964年～1967年	県指導者養成講座[11] 開始
６．発展第３期	1968年～1972年	全国高校家庭クラブ研究発表大会開催
７．発展第４期	1973年～1982年	ＵＭＫテレビ宮崎生徒出演等

［出典：小川正子、前掲『はまゆう』22号（家庭クラブ30年のあゆみ）、1982年］

1982年からすでに20年を経過しているので、その後の約20年間を追加すると、以下のように３期に区分できる。区分の根拠は教育課程の改訂を中心に、男女必履修の家庭科教育課程が実施された1994年度と、単位削減の２単位科目の「家庭基礎」が実施される2003年度以降とに区分した。なお、宮崎県高校家庭クラブ連盟の事務局とその実施事業等については、本稿末尾の【参考資料１】にまとめたので、参照していただきたい。

８．拡充第１期	1983年～1993年	男子の家庭科選択履修始まる
９．拡充第２期	1994年～2002年	男女の必履修始まる
１０．単位減少期	2003年～	２単位科目の「家庭基礎」始まる

２．宮崎県高校家庭クラブ連盟の加盟人数

次に、本県の家庭クラブ連盟への加盟人数から、その発展過程を概観してみよう。

1955（昭和30）年から2000（平成12）年までの本県家庭クラブ連盟の加盟人数は、【参考資料２】に示した。加盟人数は、普通教科・家庭科の科目「家庭一般」が女子のみ必修となった1963年前後に一度増加し、その後は減少していくものの、「家庭一般」の男女必履修が実施された1994年度から再び増加している。1994年の男女必履修導入時には、家庭科教員は、男子生徒にも女子生徒と同様に県家庭クラブ連盟へ加盟させることを熱望したが、当時は学校側からの理解が得られなかった。そのため、家庭部会として男子生徒の加盟促進の申し合わせをして[12]、県下の普通高校における男女生徒がともに加盟できるようにした。

その結果、全国高校家庭クラブでは、加盟学校数は減少したが、加盟人数は増加するという、いわゆる「加盟の二極化傾向」を示したが、宮崎県では加盟学校数及び加盟人数の両者ともに増加している。これは、加盟促進の申し合わせが奏功した証左であろう。さらに、申し合わせと同時期に、研究発表大会と指導者養成講座の日程を短縮し、機関誌『はまゆう』の内容を大幅に削減することによって、家庭に関する学科を持たない高校が、本県の高校家庭クラブ連盟へ参加しやすくする工夫を行った。このことが、加盟人数の減少をくい止めることになったのではないかと考えている。

Ⅲ．ホームプロジェクトテーマの特徴

宮崎県におけるホームプロジェクトのテーマは、本県高校家庭クラブ連盟機関誌である『はまゆう』に記載されているので、まず、この『はまゆう』について、概要を紹介しておく。

『はまゆう』の創刊号は、1955（昭和30）に新聞形式で県立日南高校から発行されている。1962（昭和37）年から1995（平成７）年まではＡ５判サイズの冊子になり、1996年からはＡ３判の新聞形式に戻り発行されている。この『はまゆう』の管理は、宮崎県高校家庭クラブ連盟事務局が行っているが、創刊号から８号までは欠号である。第９号以降の『はまゆう』の発行年及び掲載記事等は、【参考資料３】のとおりである。

宮崎県の場合、ホームプロジェクト活動を対外的に発表する機会としては、本県家庭クラブ連盟が主催する県家庭クラブ連盟研究発表大会がある。この発表大会は、1971年から1994年までは隔年で開催されてきたが、1999年以降は毎年開催されている。この発表内容は、機関誌『はまゆう』に掲載されているが、掲載されたホームプロジェクトは、①発表大会が開催された年に発表されたホームプロジェクト、②発表大会が開催されなかった年は前年に発表されたホームプロジェクト、③『はまゆう』の発行当番校が原稿依頼して投稿されたホームプロジェクト、等があり、全国大会での記録と照合できる発表テーマ以外は、①～③のどれに該当するのかを特定することは困難である。しかし『はまゆう』のみが、本県のホームプロジェクトを掲載しているため、およその時代背景とテーマの傾向を知ることができる。

そこで、この『はまゆう』を手がかりにして、本県におけるホームプロジェクトについて考察しておきたい。まず、1969年の９号から2000年の40号までの32冊を概観すると、「全国発表大会報告」及び「全国指導者養成講座報告」については、ほぼ毎年掲載されているが、ホームプロジェクトについては、19冊のみに掲載されている。そのほかの記事としては、「県発表大会報告」「県指導者養成講座報告」「学校クラブ活動」（各学校の活動内容の紹介）「特集」などがある。

前述の19冊の『はまゆう』からホームプロジェクトのテーマを抽出すると、【参考資料４】の通りである。これによると、ホームプロジェクトのテーマは時代の問題を捉えたものが多く、1973年のオイルショックの頃には「お中元の箱詰め価格」がテーマになり、当時の厚生省が「過食時代の栄養失調」を警告した1975年には「ラーメンの安全性について」の研究が、Ｏ－157が問題となった1996年には「我が家のＯ－157対策」の研究が発表されている。

全体的な傾向としては、1984年～1989年には食物や被服を対象としたホームプロジェクトが多く、1993年～1999年には、高齢者との関わりや健康に関する研究が目立っている。また、1999年と2000年には、家事や家族の協力をテーマにしたプロジェクトが多く見られる。

第1報で明らかにした全国のホームプロジェクトの研究動向と比較すると、食生活や高齢社会に関するものが多い点はほぼ同様であるが、宮崎県では環境問題に対する取り組みが少なく、「包装容器リサイクル法」が話題となった1994年前の1991年の３点のみである。

以上の検討結果から、本県で取り組まれたホームプロジェクトのテーマから生活課題をみると、食事改善や高齢者の生活が重要な問題であり、環境問題は生徒にとってまだ切実でないといえる。また、食生活のみに注目すると、この20年間には、貧血、糖尿病、カルシウム不足等のテーマが繰り返し取り上げられ、この課題に対する解決過程を詳細に検討すると、

病気の原因の考察・説明→有効な食品の選出→献立作成→実践等、類似した手法で取り組まれていることがわかる。

Ⅳ．ホームプロジェクトの指導方法と取り組みについて
－教員と生徒へのアンケート調査を通して－

すでに述べた通り、本県の高校家庭クラブ連盟への加盟率は、全国と比較するとかなり高く、その活動も維持されている。しかし、2002年現在、1960年代以降にホームプロジェクトや家庭クラブ活動を推進し活動してきた教員の退職時期を迎え、指導する家庭科教員に教職経験10年未満の教員が増加した。そのため、ホームプロジェクト活動や学校家庭クラブ活動を推進し拡充する意義は、若年の家庭科教員に伝わりにくくなっている。そこで、その要因を解明し、今後のホームプロジェクトの在り方等について示唆を得るために、各学校におけるホームプロジェクトの指導方法、及び生徒の意識についてアンケート調査を実施したので、その結果を考察したい。

１．ホームプロジェクトの指導実態と家庭科教員の意識【調査１】

（１）調査方法・調査対象者・調査内容

【調査１】の対象者は、宮崎県内の高校学校18校と、家庭科教員50名である。調査時期は2001年度の宮崎県高校家庭科教育研究会家庭科部会（2001年８月20日）の参加者で、調査票は会場において配付しその場で回収した。回収した高校数と家庭科教員の内訳は、以下のとおりである。なお、県内の私学を含む高校総数は53校である。

○調査対象の学校数	１８校	
内　訳	普通科等	６校
	生活情報科＋普通科	２校
	生活工学科	２校
	福祉生活科＋農業に関する学科	２校
	福祉生活科＋普通科	１校
	商業に関する学科	２校
	農業に関する学科	２校
	私立複数学科	１校
○回答者数	５０名	
内　訳	普通科等	９名
	生活情報科＋普通科	９名
	生活工学科	８名
	福祉生活科＋農業科に関する学科	９名
	福祉生活科＋普通科	２名
	商業に関する学科	７名
	農業に関する学科	４名
	私立複数学科	２名

なお、主要な調査項目は、①ホームプロジェクトの実施状況と発表形式、②ホームプロジェクトの実施時期と実施理由・学習効果、③ホームプロジェクトの指導時間と指導上の困難点、等についてである。

（2）調査結果と考察

①ホームプロジェクトの実施状況と実施時期・実施理由

ホームプロジェクトの実施状況と実施時期及び実施理由は、表１と表２に示した。ホームプロジェクトを実施している高校は11校（61.1％）で、実施していない高校は7校である。

実施していない理由は、学科によって異なるが、(a) 家庭に関する学科の福祉生活科では、介護福祉士の国家資格取得を目指すため、（b）農業に関する学科では、家庭クラブと同様に「農業クラブ」のプロジェクトを実施しているため、などの理由から時間的余裕のないことが指摘されている。また、他の２高校でも資格取得のため生徒が多忙のうえ、家庭科教員の指導経験がないことを理由にあげている。

次に、ホームプロジェクトの実施時期は、ほとんどの高校が夏休みを中心に実施しているが、その実施理由として「家庭生活への関心」「問題解決能力の養成」などの積極的な理由をあげている。また、その学習効果に対する教員の期待度と教職年数については表３に示した。10年以上の教職経験者は「非常に期待できる」または「期待できる」と、ホームプロジェクトの活動に期待を寄せている反面、教職年数が10年未満の教員は、その半数が「期待できない」と答えており、教職年数による「期待度」意識に相違がみられた。

表１　ホームプロジェクトの実施時期　(18校)

実施時期	普通科等	家庭に関する学科	その他の職業科	計	実施率（%）
夏休みの課題で	6	2	2	１０	５５．６
その他の時間で	0	1	0	1	５．６
実施していない	0	4	3	7	３８．９
計（校）	6	7	5	１８	１００．０

表２　ホームプロジェクトの実施理由（複数回答）

実　施　理　由	人　数
家庭生活に関心を持つようになる	１７
課題解決能力を身につけることができる	１７
教科書で取り扱っている	3
作業や製作の機会	0
家庭クラブに加盟しているから	１０
家庭科を好きにさせる機会	0
その他	1
無回答	3
計（人）	５１

表３　ホームプロジェクトへの期待度と教職経験年数

期待度	教職経験年数			計（人）
	０～10年	11～20年	20年以上	
非常に期待できる	0	1	0	1
かなり期待できる	1	5	2	8
普通	2	5	3	１０
あまり期待できない	5	2	0	7
全く期待できない	0	0	0	0
その他	0	2	0	2
無回答	2	1	1	4
計（人）	１０	１６	6	３２

ホームプロジェクトの実施理由の「課題解決能力を身につける」と「家庭クラブに加盟しているから」について、それぞれの期待度とクロス集計したところ、表４－①、表４－②の結果になった。この結果から、ホームプロジェクトの目的として課題解決能力の育成を考えている教員は、期待度が高いことが窺える。実際それらの教員は、県研究発表大会などでも成果をあげており、教員のホームプロジェクトに対する意識が、生徒の研究意欲と研究成果などに関連していることが明らかになった。

表４－①　課題解決能力と期待度

期　待　度	人　数
非常に期待できる	1
かなり期待できる	7
普通	5
あまり期待できない	2
全く期待できない	0
その他	1
無回答	1
計（人）	１７

表４－②　家庭クラブ加盟と期待度

期　待　度	人　数
非常に期待できる	0
かなり期待できる	1
普通	4
あまり期待できない	3
全く期待できない	0
その他	1
無回答	1
計（人）	１０

②ホームプロジェクトに要する時間

ホームプロジェクトに要する時間については、「実施している」と回答した教員32名中、12名が「今のままで良い」と回答している。しかし、「わからない」が６名、「無回答」が８名と、教員がホームプロジェクトの指導に対して、明確な意識を持たないまま取り組んでいることが窺える。また、「ホームプロジェクトの形を考え直した方がよい」「方法を検討すべき」「授業を中心に（ホームプロジェクトをさせるべき）」「学校の実態に合わせるべき」という指摘や、「教師の忙しさよりも生徒自身が、資格取得や部活動、塾や課外授業で忙殺され、放課後や休日がほとんどない」こと、あるいは「生徒が何についても全く意欲を示さず指導に乗らない」など、学校または生徒一人一人の多様な状況も理由として指摘されている。

2．ホームプロジェクト実践校における生徒の取り組みと指導方法【調査２】

（1）調査方法・調査対象者・調査内容

次に、ホームプロジェクトを夏休みに実施した生徒と教員に対して、アンケート調査を実施した。調査対象者は、前掲の【調査１】でホームプロジェクトを「実施した」と回答した４高校と、その他１高校の合計５校の生徒と家庭科教員である。

生徒に対する質問内容は、①ホームプロジェクト実施の有無、②題目選定に関する諸要因、③実施過程、の３項目で、教員に対しては、さらに④事前指導と事後指導の時間と方法について尋ねた。調査時期は、2001（平成13）年10月14日～12月24日である。回収結果は、以下の通りである。

○調査対象の学校数	５校	
内　訳	普通科等	２校
	家庭に関する学科（生活情報科）	１校
	商業に関する学科	１校
	工業に関する学科	１校
○生徒数	３５９名	
内　訳	普通科等	１５０名
	家庭に関する学科（生活情報科）	７３名
	（１年生３９名、２年生３４名）	
	商業に関する学科	６６名
	工業に関する学科	７０名
○教員数	７名	
内　訳	普通科等	３名
	家庭に関する学科（生活情報科）	２名
	商業に関する学科	１名
	工業に関する学科	１名

（2）生徒及び教員への調査結果と考察

①ホームプロジェクトの実施率

ホームプロジェクトの実施率と事前指導との関連は、表５のとおりである。

各学科ごとのホームプロジェクト実施率をみると、生活情報科は１年生と２年生それぞれの実施率は表６のとおりである。また、実施率と事前指導については、５時間の事前指導と中間指導をした生活情報科１年生が９４.４％と突出しており、説明プリントのみの学科を含んだ工業に関する学科が５２.９％と低くなっている。

②題目（課題）選定に関する諸要因

また、題目選定時期については表７に示した。「授業中」に決定させた商業科では「題目提出日が迫って」と答えた生徒数は少なくなっているが、「夏休み前」と「夏休み中」に決定した生徒の割合は、他の学科の生徒と同様であった。また、研究の範囲の設定は、題目の早期決定とは関連がないことも明らかになった。

表5　ホームプロジェクトの実施率と事前指導との関連

学科名	実施率(%)	事前指導の時期と時間数
普通科等	７１．３	夏休み直前の授業2時間
家庭に関する学科 （生活情報科）	７４．３	１年生：５時間の事前指導、２度の中間指導 ２年生：３時間の事前指導、個別指導
商業に関する学科	６３．３	夏休み直前の授業３時間
工業に関する学科	５２．９	電気科：夏休み直前の授業１時間 情報技術科：説明プリント

表6　生活情報科におけるホームページプロジェクトの実施率（単位：%）

実施程度	１　年	２　年
実施した	９４．４	５４．１
途中まで実施した	２．８	３５．１
実施しなかった	２．８	１０．８

表7　題目（課題）の選定時期と事前指導の関連

学科名	提出日が迫って (%)	事前指導の内容
普通科等	２１．３	選定の仕方の説明（１校は範囲を食物と指定）
家庭に関する学科 （生活情報科）	３７．０	１年生：具体的な問題把握の仕方を助言 ２年生：選定の仕方の説明
商業に関する学科	１０．６	授業中に課題を決定
工業に関する学科	４４．３	選定の仕方の説明（電気科） プリント配付（情報技術科） 範囲を環境問題と指定

③実施過程

実施内容と課題解決方法を概観すると、健康に留意した食事作りなど単一的手法によるものが多く、特に課題を「食物」に限定した普通科（１校）では、ホームプロジェクトはほとんど１日で実施を終わっている。また、インターネットの利用による調査に終始したものが多く、表８に示した通り、生徒の自由記述では「実践という意味がわからなかった」「深められなかった」と複数の生徒が答えている。

教員の自由記述からは、「テーマ設定と計画は、授業内でしっかり行うことが大切」「常に授業の中でホームプロジェクトへの意識付けを行うことが大切」という意見があった。また、生活情報科１年生を指導した教員は、「１年生ではなかなかテーマの設定ができないので、今回は新聞記事を収集をさせて、２、３年生への基礎作りとして取り組ませた。」と３年間の指導を段階的に行っていることが明らかになった。しかし、実施過程と方法についての言及は見られなかった。また、事後指導の方法としては、学級内で発表する学校が３校、宿題の提出のみという学校が２校であった。

表８　生徒の自由記述から

肯定的意見	・実践を通じて、調べただけではわからないことがわかった。 ・技術が身についた。 ・テーマについて家族で話し合うようになった。
自己の研究態度に対する反省	・継続は難しいが、実践したことを続けたい。 ・調べるだけで実践しなかったのでいけなかった。 ・きちんと計画をたててやればよかった。
否定的意見	・何をすればよいか分からなかった。 ・必要もないのに改善する必要はない。 ・したこては面白いが、宿題としてやりたくない。 ・意味がわからない。理解できない。

家庭科教員に対するアンケート調査からは、教職経験10年以下の家庭科教員は、ホームプロジェクトの意義についての期待度は低いものの、教職年数10年以上の教員は、ホームプロジェクトの課題解決能力の育成に期待していることが明らかになった。また、実際の指導過程では、テーマの範囲指定や、事前指導の時間を増やす等の工夫も行っていたが、それらは生徒のホームプロジェクトの実施への効果は少なく、計画や実施状況も含めた中間指導を行っている学校のみが、生徒に対して効果的に実施できたという結果を得た。

一方、生徒の側からは表８の自由記述にもあるように、事前指導だけでは、ホームプロジェクトの実施過程への具体的なイメージを持つことは困難で、他者の発表を聞くことによりその方法を理解していることが窺える。

これらのことから、ホームプロジェクトは、家庭科を履修している間に複数回実施し、家庭科教員は、事前指導において題目選定や解決方法までを指導することが、生徒の学習効果を向上させることになることが明らかになった。

以上の文献調査及びアンケート調査結果の考察から、本県の学校家庭クラブ活動及びホームプロジェクト活動については、以下の４点を指摘することができる。

① 本県の高校家庭クラブ連盟は、1952（昭和27）年に結成された。またその加盟人数は、家庭一般の女子のみ必修が実施された1960年代は増加したが、その後は減少した。しかし、1994年度の男女必履修を契機に、男子生徒や普通高校の男女生徒の加盟促進を願って、「申し合わせ」を決議した。そのため、本県では加盟高校数と加盟人数ともに増加し、さらに、参加しやすくするために、学校家庭クラブ活動の年間事業計画等を精選したこと、などが明らかになった。

② 本県におけるホームプロジェクトの取り組みは、全国のそれと比較すると環境問題への取り組みが少ない。しかし、本県の家庭科教員は、ホームプロジェクトの指導に苦慮しながらも、課題の発見→→課題解決のための方法→→解決のための実践→→結果の考察と評価等、学習過程とその方法については高く評価し、教職年数の長い教員ほど、生徒の「問題解決能力の育成」には意義があるととらえていることが明らかになった。

③　ホームプロジェクトは、家庭科を履修している学年に、複数回のホームプロジェクト活動の機会を設定することが、学習効果があることが示唆された。

④　今後、本県の家庭クラブ活動を活性化するためには、ホームプロジェクトの課題発見への手だてや、生活課題のとらえかた等、指導方法を見直すことが必要であり、あわせて教職年数10年未満の若い家庭科教員には指導者養成講座など利用して、ホームプロジェクトの意義、及び指導者としての指導力を習得できるように環境を整備する必要がある。

なお、本研究を進める過程で、戦後高校家庭科の当該資料の欠落や散逸、及び保管先不明の資料等が多いことが明らかになった。宮崎県の高校家庭科５０年史研究を蓄積・推進することを念頭において、今後も資料調査に取り組んでいきたい。

（2003年４月30日受理）

【注】

1）　宮崎県高等学校教育研究会家庭部会編集の『会誌』（以下、家庭部会『会誌』と略称）は、1963年から毎年１冊、発行されている。2002年度の事務局は宮崎北高校で、2003年３月の時点で39号までが刊行されている。体裁は８号から32号までがＢ５判、33号からはＡ４判に拡大した。また名称は、創刊号から７号までは紛失のため確認できないが、８号から17号までは『会報』、18号からは『会誌』となっている。１冊の会誌は、平均80頁から90頁程度で、編集内容は主に１年間の部会事業・地区会・研究部会の活動報告と技術検定、家庭クラブの事務局の報告、産業教育指導者養成講座などの全国大会参加の報告などから成っている。また、巻末には会則等が記載されている。

2）　全国高等学校家庭クラブ連盟結成50周年記念誌委員会『50周年記念誌』2002年、37頁。

3）　米国家庭科教育視察については、柴静子「占領下日本における家庭科教育ナショナル・リーダーの米国視察（第１報、第２報）」（『日本家庭科教育学会誌』第44巻第３号、2001年10月）に詳細な分析がある。

4）　前掲２）と同じ、130頁。その他では、柴静子「占領下における家庭科教育の成立と展開（Ⅷ）－新制高等学校家庭科教員の再教育と教職現場－」（『中国四国教育学会教育学研究紀要』第44巻、1998年）がある。

5）　前掲２）と同じ、37頁。なお、各都道府県における高校家庭クラブ連盟の結成年は以下の通りで、1959年には、東京に全国高校家庭クラブ会館が建設された。ただし、2003年３月現在では、京都、長野、静岡の３府県が脱退し、44都道府県が加盟している。

1950年（６府県）：新潟　大阪　神奈川　三重　岐阜　京都
1951年（６都県）：東京　岩手　宮崎　埼玉　岡山　徳島
1952年（14道県）：滋賀　富山　鳥取　秋田　北海道　鹿児島　宮城　栃木　奈良　和歌山　長野　愛媛　福岡　大分
1953年（13県）　：山梨　高知　山形　広島　福島　島根　福井　茨城　熊本　群馬　山口　香川　佐賀

1954年（3県）：長崎　千葉　石川
1955年（1県）：青森
1956年（2県）：沖縄　静岡
1957年（1県）：愛知
1958年（1県）：兵庫

6）　小川正子は、1949年宮崎県立高原畜産高校（現在は高原高校と改称）に勤務後、小林高校、都城泉ヶ丘高校を経て、1966年から1984年までの18年間、宮崎県教育委員会指導主事及び主査を務めた。その後は、1986年から11年間宮崎女子短期大学教授として務め、1998年３月に同短期大学を退職した。

7）　本県の高校家庭クラブ連盟の結成年については、小川正子氏の回想（資料１）では「1952（昭和27）年２月12日」であるが、『宮崎県産業教育百年史』（宮崎県教育委員会、1985年）によると、「昭和26年」（同百年史、218頁）と、「昭和28年２月１７日」（同百年史、宮崎県産業教育年表、373頁）の記載がある。筆者の調査結果、結成年は「1952年２月」が正しい。

8）　文部省『家庭科　ホームプロジェクトの手びき』1952年、42頁～45頁。

9）　「５．県指導者養成講座と九州地区家庭クラブ連盟」、宮崎県高等学校教育研究会家庭部会『会誌』19号、1982年、71頁

10）　宮崎県教育委員会編『宮崎県産業教育百年史』（1985年）、223頁。なお、1952（昭和27）年～1958（昭和33）年まで宮崎県教育委員会で家庭科の指導主事を務めた横山ユキオは、小林高校の研究指定は昭和27～28年であると回想している（横山ユキオ「三十周年の想い出あれこれ」（『はまゆう』22号、1982年、25頁）。また、指定研究のテーマ「地域の生活改善と家庭科カリキュラム」は野津初子の回想による（同誌26頁）。

11）　宮崎県の指導者養成講座は、家庭クラブの研究や運営方法の学習を目的として顧問教師と役員の生徒が、２泊３日の日程で行うリーダー養成のための研修会である（参考資料１を参照）。全国でも、1960年に落成したばかりの「家庭クラブ会館」（東京）において、「幹部養成講習」として第１回大会が開催された（「３指導者養成講座」全国高等学校家庭クラブ連盟結成50周年記念誌委員会『50 周年記念誌』2002年、51頁）。

12）　「学校家庭クラブ連盟加盟促進について」の申し合わせは、1995（平成７）年１月30日に開催 された家庭科幹事会において決議承認され、２月１日より施行した。その内容は、県立盲学校、ろう学校、養護学校、及び通信制、定時制高校を除く全ての高等学校が加盟することとしている。また、この幹事会では、連盟費を緩和し、指導者養成講座の日程と内容を縮小し、それに代わって研究発表大会を毎年実施することなどを取り決めた。

【参考資料１】　宮崎県高校家庭クラブ連盟の事務所と実施事業

年度	事務局	実施事業		機関誌『はまゆう』の発行校
		研究発表大会	指導者養成講座	
1953	宮崎大宮			
1954	延岡			

1955	都城泉ヶ丘			日南（新聞）
1956	都城泉ヶ丘	宮崎大宮高校		延岡向洋
1957	高鍋	宮崎市教育会館		日南農林
1958	妻	宮崎市教育会館		富島
1959	福島			南郷園芸
1960	小林		えびの（詳細不明）	都農
1961	大淀	宮崎市教育会館		福島
1962	日南			川南（はまゆう）
1963	高鍋	高鍋高校		都城泉ヶ丘
1964	宮崎大宮		青島青年の家	高鍋
1965	延岡	野口記念館		都城西
1966	都城西		都井岬黒潮荘	妻
1967	本庄	県立図書館		高城
1968	延岡西		青島青年の家	延岡
1969	小林	県立図書館		福島
1970	宮崎南		青島青年の家	本庄
1971	宮崎南	注①参照		高鍋
1972	宮崎大宮	県民文化ホール		日南
1973	妻		青島国民宿舎	高千穂
1974	日南	県民文化ホール		都城西
1975	都城泉ヶ丘		青島国民年金保養センター	宮崎南
1976	富島	県民文化ホール		宮崎大宮
1977	本庄		青島青少年自然の家	富島
1978	小林	県立図書館		高城
1979	妻	県民文化ホール		延岡
1980	高鍋		青島青少年自然の家	都農
1981	福島	県民文化ホール		日南
1982	高城		青島太陽閣	小林
1983	延岡	県民文化ホール		飯野
1984	都城西		青島青少年自然の家	延岡西
1985	富島	県民文化ホール		宮崎南
1986	本庄		綾サイクリングターミナル	高千穂
1987	小林	小林高校体育館		高城
1988	延岡西		むかばき少年自然の家	高鍋
1989	宮崎南	県民文化ホール		本庄
1990	都城泉ヶ丘		総合青少年センター	宮崎商業
1991	宮崎大宮	みやざき会館		富島
1992	高鍋		総合青少年センター	妻
1993	日南	日南高校体育館		都城西
1994	飯野		総合青少年センター	小林
1995	妻		・都城泉ヶ丘高校視聴覚室 ・延岡商業高校	妻

1996	延岡西	県立図書館	県立図書館	延岡西・延岡商業 以降新聞形式
1997	日向	県立図書館	県立図書館	高鍋
1998	高鍋	JAアズムホール	県立図書館	高鍋
1999	宮崎商業	宮崎県医師会会館	宮崎市中央公民館	宮崎大宮
2000	宮崎南	宮崎市民文化ホール	宮崎市民文化ホール	本庄
2001	日南工業	JAアズムホール		

注）第19回全国高等学校家庭クラブ連盟研究発表大会（宮崎大会）は、宮崎市民会館で開催された。

【参考資料2】　宮崎県高校家庭クラブ連盟の加盟学校数と加盟人数

年度	加盟校数	学校数	加盟率	加盟人数	生徒数	加盟率	男子加盟人数	男子加盟率
1964	24	47	51.1	6,227	39,907	15.6		
1965	21	54	38.9	6,251	46,683	13.4		
1966	22	56	39.3	6,812	49,719	13.7		
1967	23	56	41.1	7,089	51,421	13.8		
1968	22	56	39.3	7,036	50,369	14.0		
1969	22	51	43.1	6,892	49,053	14.1		
1970	22	52	42.3	6,726	47,628	14.1		
1971	23	51	45.1	6,674	47,064	14.2		
1972	23	52	44.2	6,520	42,356	15.4		
1973	23	51	45.1	5,892	47,443	12.4		
1974	23	48	47.9	5,530	48,690	11.4		
1975	23	49	46.9	4,857	48,680	10.0		
1976	23	51	45.1	4,553	48,999	9.3		
1977	22	53	41.5	4,290	48,462	8.9		
1978	22	52	42.3	4,249	47,851	8.9		
1979	22	52	42.3	4,141	47,984	8.6		
1980	22	52	42.3	4,197	48,417	8.7		
1981	22	57	38.6	4,016	47,590	8.4		
1982	21	56	37.5	4,219	45,411	9.3		
1983	20	57	35.1	4,577	46,095	9.9		
1984	20	57	35.1	4,314	46,983	9.2		
1985	20	57	35.1	4,345	49,175	8.8		
1986	20	57	35.1	4,342	48,853	8.9		
1987	20	57	35.1	4,330	49,952	8.7		
1988	20	54	37.0	4,447	51,951	8.6		
1989	20	54	37.0	4,446	53,982	8.2		
1990	20	54	37.0	4,362	55,090	7.9		
1991	20	54	37.0	4,425	54,561	8.1		
1992	20	53	37.7	4,441	53,546	8.3		
1993	20	51	39.2	4,478	52,800	8.5	579	1.1
1994	19	52	36.5	5,670	51,833	10.9	1,217	2.3
1995	24	52	46.2	7,697	50,692	15.2	7,697	15.2
1996	25	52	48.1	7,190	49,953	14.4	2,555	5.1
1997	27	52	51.9	8,096	48,360	16.7	3,485	7.2
1998	30	52	57.7	8,561	46,939	18.2	3,714	7.9
1999	32	51	62.7	8,670	46,273	18.7	3,693	8.0
2000	30	53	56.6	7,803	45,266	17.2	3,335	7.4

注）学校数及び生徒数は、『宮崎県統計年鑑』各年版より作成。ただし、学校数には県立及び私立の全日制、定時制、単位制の高校を含むが、通信制は含まない。

【参考資料３】宮崎県高校家庭クラブ連盟機関誌『はまゆう』の内容一覧(第９号から40号まで)

号数	刊行年度	全国発表大会報告	全国指導者養成講座報告	県発表大会報告	県指導者養成講座報告	ＨＰ	学校家庭クラブ活動	全国大会出場ＨＰ	全国大会出場ＳＰ	卒業生便り	地域紹介	文芸	特集	連盟予算決算報告	その他
9	1969	○	○			○	◎			○		○			
10	1970	○	○		○		○		○	○		○		○	全国大会準備委員会
11	1971	○	○			○	○					○	○		本県家庭クラブの歩み
12	1972	○	○	○		○	○					○			
13	1973	○	○		○		○	○				○			
14	1974	○	○	○		○	○			○	○	○	○		家政科学級減について
15	1975	○	○		○	○	◎				○	○	○		
16	1976	○	○			○	○			○	○①		○		
17	1977	○	○		○		○			○		○	○		
18	1978	○	○							○	○	○②	○		小物入れ
19	1979	○	○				○			○		○②	○		
20	1980	○	○		○		○	○		○			○		
21	1981	○	○			○	○			○		○③	○		
22	1982	○	○		○		○					○	○		
23	1983	○	○	○④		○	◎					○	○		
24	1984	○	○	○		○	○		○			○②	○		
25	1985	○	○			○	○					○⑤	○		

26	1986	○	○				○				○		○		
27	1987	○	○			○	○				○	○	○		
28	1988	○	○		○	○	○				○	○	○		規約
29	1989	○	○	○		○	◎				○	○	○		規約
30	1990	○	○		○	○					○		○		規約
31	1991	○	○	○					○		○		○		規約
32	1992	○	○		○	○	○				○		○⑥	▲	規約
33	1993	○	○			○					○		○	▲	規約
34	1994	○	○		○	○							○	▲	規約、⑥、⑦
35	1995	○	○		○④	○	○						○	▲	規約、⑦、⑧
36	1996	○		○	○		○	○						○▲	
37	1997	○	○	○	○									○▲■	
38	1998	○	○	○	○							○⑤		○▲	⑨
39	1999	○	○	○	○	○			○					○▲	⑧
40	2000	○	○	○	○								○	○▲■	

注）HPはホームプロジェクト、SPはスクールプロジェクトを表す。表中の○印はその記事の掲載を示す。
また、◎はスクールプロジェクトを、▲は年間事業報告を、■は役員名簿を表す。なお、表中の数字は以下を表す。
①郷土料理、②雑記、③家遊についての作文、④各地区の内容、⑤家政科で学んだことに関する作文、
⑥産業教育１１０周年記念大会・意見体験発表、⑦お魚料理コンテスト、⑧意見体験発表、⑨学科紹介。

【参考資料４】　宮崎県高校家庭科におけるホームプロジェクトのテーマ

本数	年度	ホームプロジェクトのテーマ	高等学校	生徒氏名
	1969	記載無し		
	1970	記載無し		
	1971	記載無し		
1	1972	働きやすいエプロンの工夫	宮崎大宮	米良孝子
2	1972	わが家の食品公害対策	都城西	山崎茂子
3	1972	牛乳を上手に使えるようになった母	延岡西	吉良知子
4	1973	夏の家事作業を快適に	宮崎大宮	勝吉孝子
5	1974	かおりちゃんと絵本	小林	木村裕子
6	1975	我家のゴキブリ退治	高鍋	田中久子
7	1976	お中元箱詰め価格	都城泉ヶ丘	愛甲靖子他
	1977	記載無し		
	1978	記載無し　記載無し		
	1979			
8	1980	寝たきりの祖父のために	都城西高校	花村優子他
9	1981	姪への贈り物	妻高校	入木一枝
10	1981	ラーメンの安全性について	都城泉ヶ丘	新地聖子他
	1982	記載無し		
11	1983	カッパの改善	都城泉ヶ丘	山口房美
12	1984	中学校の制服スカートのリフォーム	飯野高校	浜田雅子
13	1984	家庭菜園を生かした献立の工夫	日南振徳商業	村上恵美子
14	1985	台所作業を快適に	都城泉ヶ丘	大久保愛子
15	1985	幼児のおやつを見なおそう	福島	鬼塚さおり
16	1985	いわしをもっと食卓に	日南	井野和枝他
17	1985	貧血の食事ー母と妹のためにー	都城西	木原由紀子
18	1985	ワイシャツのリフォーム	延岡	河原直美
19	1985	ビタミンAを給源とした夏野菜の利用	延岡西	大野恵子
	1986	記載無し		
20	1987	父の健康を願って ー高血圧の人の食事の研究ー	小林	淵上涼子
21	1987	魚の和　父の趣味の釣りを生かして	高鍋	徳渕直美
22	1987	とうもろこしを利用して	延岡西	西村とみ子
23	1988	楽しい食事を父にプレゼント	妻	井上恵美子
24	1989	貧血と食事	妻	鈴木香織
25	1989	作業着の改善	延岡	新田典子
26	1990	私の食生活改善	福島	竹原照美
27	1990	ゴミから絵本へ	宮崎商業	佐々木由紀
28	1990	楽しく簡単トイレのインテリア	宮崎大宮	古川志乃
29	1991	たのしい文字遊び	宮崎大宮	古川志乃
30	1991	私のエコロジー対策	福島	古瀬亜紀
31	1991	SYUN´S TOYBOX	延岡西	浮島明友美
32	1991	資源の再利用 ー捨てればゴミ、生かせば資源ー	高城	綿屋ひとみ
33	1991	過剰包装を防ぐために ー買い物袋をひと工夫ー	都城西	八木美枝子
34	1991	住まいの風通しについて	高鍋	永谷美智代
35	1992	本当に身体によい薬とは	都城西	坂元直子
36	1993	父の健康を願って　高コレステロールの父の食事改善	都城泉ヶ丘	西川裕子
37	1993	祖母のために役立つもの	日南	西方之恵
38	1993	にんじん大好き	延岡西	安本麻理子
39	1993	パパ大好き　まい　ブランド	宮崎大宮	森　みどり
40	1993	THE　ダイエット　弟の間食改善のために	高鍋	岡部亜記
41	1993	祖母の入院生活を快適なものに	都城西	福留美奈子
42	1994	祖母の健康を願って　骨を丈夫に	都城泉ヶ丘	中村隆介
43	1995	祖父母の幸せを願って	都城泉ヶ丘	濱砂洋介

44	1996	私と糖尿病の二人三脚	富島高校	近藤理恵
45	1996	身体障害者の祖母を助けるために	都城西	田代明子
46	1996	家族ぐるみのアトピー克服	延岡西	柳田梨奈
47	1996	家族の健康を願って	高原	坂下和代
48	1996	我が家のO-157対策	富島	木田恵理香
49	1996	いきいきおばあちゃんと共に	福島	谷口さとみ
50	1996	車椅子と共に生きてリサイクル自助具を外山さんへ	日南農林	松田俊昭
	1997	記載無し		
51	1998	家族の絆　糖尿病の父にできること	富島	安田幸代
52	1999	祖母のためにできる事	小林商業	内田隆之
53	1999	家事は誰のお仕事	延岡商業	椎葉京子
54	1999	食生活を見直そう	富島	川崎あゆみ
55	1999	我が家の防災対策－防災頭巾製作を通して	宮崎大宮	荒瀬寿恵
56	1999	Dear Father家族の絆を深めて	日南農林	東　美樹
57	1999	おじいちゃんいつまでも元気でね －慢性腎不全の祖父－	高原	福丸由佳 坂元夕乃
58	2000	我が家のCa強化大作戦	宮崎大宮	
59	2000	離れて暮らす祖母との交流	高鍋	日高春恵
60	2000	Sucess For　Athlete　楽しい食事で	都城工業	瀬戸山剛
61	2000	点字を通して　家族の夢・実現	高城	米満理恵
62	2000	ムダブロ・家族が効率よく風呂にはいるには	高千穂	甲斐敬人
63	2000	私の母は西米良村で一番のパワフル美容師	西都商業	濱砂千穂

注）①1972年～1999年のテーマは『はまゆう』より作成
②1999年～2000年のテーマは『県家庭クラブ発表要項』より作成

【付　記】

以下の文献資料は、本研究過程で収集した本県の高校家庭科教育関連の文献資料で、2003年３月現在で整理したものである。不明分の文献資料等については、随時調査し補足していくが、宮崎県高校家庭科教育５０年史研究を進めるための覚え書きとして掲載しておくことにした。なお、本文や注記等ですでに紹介し引用した文献も含まれていることをお断りしておく。

1. 生徒のホームプロジェクトの実例：宮崎県立大宮高等学校「洗たく台のくふう」、
文部省『家庭科　ホームプロジェクトの手引き』1952（昭和27）年、中央書籍株式会社
2. 全国家庭クラブ連盟成人会長・西村三郎より宮崎県教育長・ 猪崎諭宛て文書
「全国高等学校家庭クラブ研究発表大会についておねがい」1969年６月付け（小川正子氏所蔵）
3. 学校教育課　主査 小川正子「学校家庭クラブ結成30年をふりかえる」
宮崎県高等学校教育研究会家庭部会『会誌』第19号所収、1982（昭和57）年、66～71頁
4. 「４．家庭に関する学科を設置する高等学校」、『宮崎県産業教育100年記念事業』所収
宮崎県教育委員会、宮崎県産業教育振興会、1984（昭和59）年 （小川正子氏所蔵）
5. 県産業教育審議会委員　小川正子「(7)産業教育百年　－私の中の家庭科－」、『産業教育みやざき　会報』第22号（県産業教育記念特集）所収、県産業教育審議会、1985（昭和60）年、８頁（小川正子氏所蔵）
6. 宮崎女子短期大学　小川正子「家政科に学んだ誇りを持ち続けよう」、都城泉ヶ丘高校『記念誌－家政科の想い出』所収、1994（平成６）年、 ８～９頁（小川正子氏所蔵）
7. 「家政科のあゆみ」、「宮崎大宮高等学校家庭クラブの活動」、宮崎大宮高等学校『家政科記念誌』所収、1995（平成７）年、22～60頁（坂本和代所蔵）
8. 小川正子氏の直筆メモ（小川正子氏所蔵）

①「全国家庭クラブ大会開催辞退の理由」1969年
②「家庭クラブ全国大会までの経緯」　1969年
③「家庭クラブの件　福岡よりの来訪」　1969年

9. 全国高等学校家庭クラブ研究発表大会集録
○1971年版（19回）、1973年版、1977年版、1980年版、1984年版（32回）
以上は、小川正子氏所蔵。
○1969年版（17回）、1970年版、1971年版、1972年版、1974年版、1975年版、1976年版（24回）、1977年版、1978年版、1979年版、1981年版、1985年版、1988年版（36回）
以上は、宮崎大学教育文化学部（福原美江）所蔵。

10. 宮崎県高校家庭クラブ連盟関係資料
①宮崎県高校家庭クラブ連盟機関誌『はまゆう』（同事務局保管）
＊ ９号（1959年）～35号（1995年）　Ａ５判冊子
＊38号（1996年）～39号（1999年）　Ａ４判新聞形式
ただし、１号（1953年）～８号（1958年）、及び、36号～37号は欠号。
②全国高校家庭クラブ発表大会要項
＊第19回（1971年）～第48回（1999年）　Ｂ５判冊子

11.『宮崎県産業教育九十年史』、宮崎県教育委員会編、1975年、全266頁

12.『宮崎県産業教育百年史』、宮崎県教育委員会編、1985年、全449頁

13. 全国高等学校家庭クラブ発表大会記念誌
①福島大会記念誌　(1977年)
②大分大会記念誌　(1978年)
③広島大会記念誌（３０周年記念）　(1982年)
④鹿児島大会記念誌　(1984年)
⑤栃木大会記念誌　(1985年)

14. 産業教育指導者養成講座研究集録
①９号（1968年）～40号（1999年）　Ｂ５判冊子
②『40年のあゆみ』（1992年）　Ｂ５判冊子
ただし、１号（1960年）～８号（1967年）は欠号

15. 家庭クラブ加盟校一覧
①昭和40年（1965年）会員名簿：Ｂ５判冊子
②昭和43年（1968年）～平成12年（2000年）：Ｂ５判冊子

16. 宮崎県産業教育振興会及び同会報『産業教育　みやざき』
宮崎県産業教育振興会は、県内の産業教育の向上と振興を図る目的で、1955年10月に結成された。事務所は宮崎県教育庁学校教育課（前掲12の『宮崎県産業教育百年史』333～341頁参照）である。同教育振興会は機関誌会報『産業教育　みやざき』（1964年創刊で、2003年３月現在４０号まで刊行）を編集・刊行している。なお、会報第２２号『産業教育　みやざき』（1985年、Ａ５判、全９０頁）は、県産業教育100年記念特集である。

17. 宮崎県高等学校教育研究会家庭部会及び同『会誌』
高校家庭科の発展と向上に寄与するために、家庭科担当教職員で組織され、研究や研修、講演会等の開催、会誌の発行等を実施している。毎年８月下旬に総会を開催し、機関誌は年度末の３月に刊行。

『会誌』は、2002年度の家庭部会事務局の県立宮崎北高校に所蔵されているのは、以下の25冊である。第１号から７号、10号、11号、13号15号、33号、34号　は欠号で保管されていない。

なお、会誌名は、第１号から７号については欠号のため確認できないが、８号から17号までは『会報』、18号以降は『会誌』と改称された。また体裁は３２号まではB５判であったが、３３号（平成８年度）から大判のＡ４判になっている。

○家庭部会事務局（2002年度家庭部会事務局・県立宮崎北高校所蔵分）

第８号・昭和46年度
第９号・昭和47年度
第12号・昭和50年度
第14号・昭和52年度
第16号・昭和54年度～第32号・平成７年度
第35号・平成１０年度～第38号・平成13年度

なお、以下の号は、宮崎大学教育文化学部家庭科教育研究室（福原美江）にもある。

第17号・昭和55年度、　第18号・昭和56年度、　第19号・昭和57年度
第27号・平成２年度、　第28号・平成３年度、　第29号・平成４年度
第32号・平成５年度、　第33号・平成８年度、　第34号・平成９年度
第35号・平成10年度

18. 福原美江「高等学校家庭科教育の改革視点」、『宮崎大学教育学部紀要　芸・保体・家・技』第59号、1984年９月。
19. 福原美江「宮崎県における高校家庭学科再編成の実態」、日本家庭科教育学会九州地区大会、1998年７月、鹿児島市）における口頭発表原稿及び配付資料
20. 文部省『産業教育八十年史』1966年（大蔵省印刷局）、同『産業教育百年史』1986年（ぎょうせい）
21. 日本家庭科教育学会編集『家庭科教育５０年－新たなる軌跡に向けて－』2000年、建帛社
22. 渡瀬典子「学校家庭クラブ活動における『奉仕的活動』の変遷－『FHJ』誌の分析から－」、日本家庭科教育学会誌、45巻3号、2002年10月。